寄　書

転換期対応策における前提条件を考える

佐　野　幸　吉*

今日の転換期には，いろいろの問題がある．資源や，食糧や，エネルギーの問題，公害の問題，発展途上国のナショナリズムや，南北対立の問題，中東や，朝鮮の紛争の問題等々．これらを別の側面から総括してみれば，安全保障の時代であり，低成長，高負担の時代であり，弱者強声の時代であるといわれているのである．

何か気味の悪いものが潜んでいるような，不安の時代である．数多くの対応策が提案されているのも当然である．しかしながら，対応策をたてる前に，どうしても変えることのできない，幾つかの原則的な前提のあることを考えておかなければならない．

わが国は，天照大神以来，家族共同体的に，発展して来た単一民族の国である．国内において，異民族間の死活の闘争はなかつた．終身雇用制は，そこから生まれたと思う．人事管理上，この制度を守るために，年功序列，学歴優先が必要になつた．その結果は，多民族の国に比べて，甘え過剰，依存過多，自主性欠如の状態になつたといえるのではないか．

また，わが国は，人口の割りに，資源の乏しい国である．原料を安く輸入して，製品を高く輸出するという，通商国家として生きていくよりほかに方法がない．

加工のための技術は，そのためである．技術導入も，技術教育も，技術の開発研究も，すべて，製品を高く売らなければならないからである．生産設備の近代化も必要である．生産のためには，質の高い労働力もなければならない．これらを整えるためには，資本も必要である．通商には，国際関係が大切である．国際政治のやり方いかんでは，わが国存立の明暗が決められるかも知れない．勿論，国内政治の問題も重要である．

つまり，生きるための通商，そのための技術，それから資本や，労働や，政治の少くとも，五つの側面で，転換期の要求に，適時適切に，対応できなければならない．

大学の目的は，学術の中心として，教育，研究に関する実践と，その成果によつて，世界の平和と，人類の福祉に貢献するということである．つまり，学術は人類の福祉に貢献できなければならない．

私見ではあるが，学術は，物の真理と，心の真理を，一つに融合した全体であると思う．科学や技術は物の真理を芸術や宗教は心の真理を問題とする．

このように，普遍的な真理と，個性的な真理を綜合し，融合できる人が学者である．物や心の真理を，ただ，分析的に探究する人は研究者といつたらよい．学者は綜合するために，分析するけれども，研究者は分析だけのために分析する．転換期が求めているのは，学者の方である．研究者に，細分化された専門の立場だけを，主張されたのでは，重大なる選択を誤ることにもなりかねない．

$$\left.\begin{cases}\text{物の真理……科学，技術}\\\text{心の真理……芸術，宗教}\end{cases}\right\}\text{融合……学者}$$

人間は必ず死ななければならないけれども，死ぬことはまた生きることでもある．人間は生かされて，生きているが，すべては諸行無常である．すべて，生物は，自然の因果必然性の法則に支配されて，生きている．その中で，人間だけが自由を持つているけれども，自分や，自分の仲間だけを，しあわせにすることはできない．自利利他の原理が，人間幸福の基本である．

人間がどれほど豊富に物を生産することができ，どれほど合理的に，それを分配することができても，そのことによつて，人間本来の人間性を実現することはできない．人間の人間性はからだと，心とに分けられない具体的な全体にある．人間は本質的に無智であるというのが心の真理である．この真理に目覚めることによつて，人間は本来の人間性を実現することができる．そのときにはじめて，自己中心的理性や利己主義的感情や欲望から脱出して，物事をありのままに見ることができ，他人の悲しみを，自分の悲しみと同じに感じることができるのである．それが，ほんとうの生きがいのときである．

つまり，転換期対応策の前提としては，終身雇用制の継承，生活のための通商国家の条件，学者と研究者との峻別，人間性の実現などの検討結果を不変の原則として採り入れるべきものと考えるというのである．

会員各位の御叱正をお願いする．

* 本会名誉会員，前会長　名古屋工業大学学長